

研究課題 関節リウマチ患者の生命予後からみた至適医療の確立に関する研究

研究代表者 山中 寿（東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター所長）

■研究の背景

関節リウマチは、関節が破壊されて日常生活動作に著しい障害をきたす疾患であり、関節破壊をいかに抑制するかが問題であった。そして生物学的製剤などが導入され、関節破壊の防止や日常生活動作の保持が可能になってきた。しかし、関節リウマチは動脈硬化性疾患などの内臓合併症も多く、生命予後をも悪化させる、つまり寿命にも関係する疾患であることが明らかになってきた。これは長期予後考えた場合に大きな問題である。

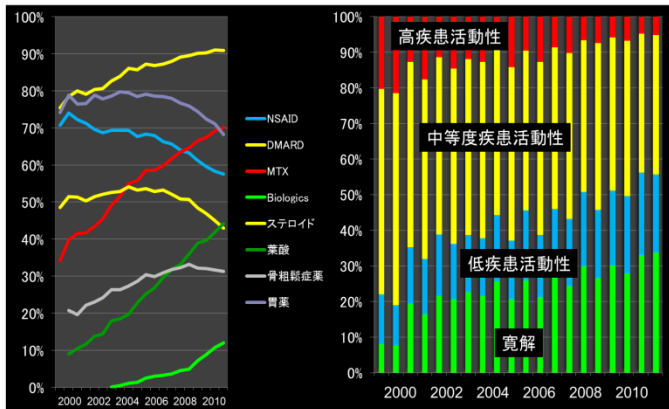
■研究の目的

本研究班の目的は、厚生省研究班として初めて関節リウマチ患者の生命予後から見た至適医療についての提言することである。

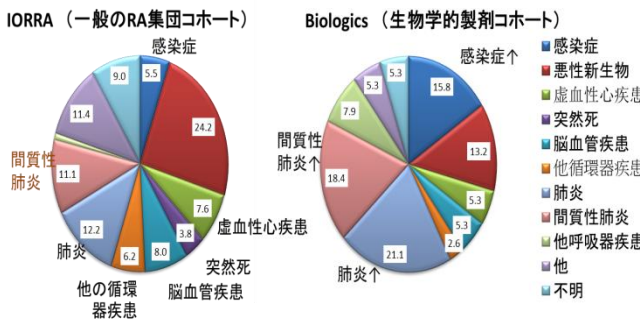
■研究の成果（1）臨床的視点から

関節リウマチの治療は進歩し、治療薬の変遷に伴い患者さんの疾患活動性は著しく改善した。

東京女子医大IORRAによる関節リウマチ治療の変遷 2000～2010



◆生物学的製剤を使用した2,746例、6,965.7人年の生命予後を検討したが、標準化死亡比SMRは日常診療コホートIORRAと差はなく、生物学的製剤投与で死亡は増えなかった。死因では感染症、呼吸器疾患が増え、心疾患、悪性腫瘍が減少していた。



この死因を欧米と比較すると、我が国では呼吸器疾患が多く心疾患が少ないことがわかった。

■研究の成果（2）医療経済的視点から

関節リウマチ患者の医療経済学的検討をIORRAコホートの調査を利用して実施した。

- 完全な健康を1.0、死亡をゼロとする効用値の平均は0.76であった。
- 関節リウマチ患者のQOLと疾患活動性が強く相関した。
- 関節リウマチ患者の年間の1人当たりコストは
 - ・直接費用が168万円
 - ・間接費用が76万円、合計244万円であった。
- 関節リウマチ患者（総数70万人）では
 - ・直接費用1兆1780億円
 - ・間接費用5,330億円で、合計1兆7110億円であった。

■研究班からの提言

本研究の成果より、関節リウマチ患者に対する至適医療を行うために本研究班から以下を提言した。

- 日本人関節リウマチ患者の総死亡は欧米と変わらないが、死因は異なり、呼吸器疾患が多く、心疾患が少ない。
- 生物学的製剤投与により総死亡は増加しないが、死因では感染症、呼吸器疾患が増えて、心疾患が減少する。
- 関節リウマチ診療は進歩したが、早期からの十分な治療などが徹底されているとは言えず、改善が必要である。
- 関節リウマチ診療の進歩に伴い医療費が高額になっているが、積極的な疾患コントロールにより、直接コスト、間接コストともに抑制できる可能性があり、長期的には費用対効果を有する。
- 現在の関節リウマチ治療の方向性は妥当であるが、改善すべき点もあり、特に感染症と呼吸器疾患のマネジメントが重要である。

■今後の課題

本研究班事業により、現在の関節リウマチ治療の方向性は妥当なものであるが示されたが、改善すべき点も残されており、特に感染症、呼吸器疾患のマネジメントが重要であることがわかった。

